



Title	認知症の人にも優しい記号のデザイン
Author(s)	定村, 俊満
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 81-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86324
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

認知症の人にも優しい記号のデザイン

定村 俊満 株式会社ソーシャルデザインネットワークス代表、日本サインデザイン協会常任理事

これまで情報デザインと環境デザインの分野で仕事をしてきた。代表的なデザインは、福岡市地下鉄七隈線のトータルデザイン、九州大学病院小児医療センターの環境デザインなどで、いずれも障がいをもつ人たちやこども達が、安心して活動できるバリアフリーデザイン、ユニバーサルデザインを大切に環境整備をおこなった。また、所属している日本サインデザイン協会では、標準案内用図記号の開発に関わり、2018年にはオリンピック・パラリンピック東京大会のための図記号の追加開発をおこなった。

発表では、認知症の方を対象とした記号のデザインについて報告をおこなった。日本では、2025年に高齢者の5人に1人が認知症になるという試算もあり、認知症への対応は喫緊の課題である。福岡市では、人生100年時代の健康社会モデル「福岡100」で100のアクションを進めており、そのひとつとして実施されたのが「認知症の人にもやさしいデザイン」プロジェクトだった。

海外の資料調査からはじめてが、エビデンスがないデザイン事例が多いことから、福岡市内の高齢者施設20カ所で、図記号の理解度調査を実施した。その結果、健常者の理解では問題のない図記号が、認知症の人には理解が困難であることが

判明した。お手洗いの男女ピクトでは、「男の人と女の人が話をしてる」といった誤回答もあった。さらに問題となるのは、非常口ピクトグラムの理解度が、わずかに29ポイント（約29%）だったことである。

認知症の人は「ピクトグラムを見た形だけで理解している」、「全体像よりも部分を見ている」などの傾向があった。一方、色彩の意味、文字表記は理解度が高いことも確認できた。案内図記号の理解度を高めるためには「モノと人の動作を組み合わせる」、「文字を併記する」、「文字表記は、浴室ではなく風呂といった、使い慣れた言葉を使う」など、発表ではさまざまなデザイン方法を紹介した。

冒頭で述べたように、認知症への対応は施設内だけではなく、社会全体での配慮が必要である。認知症の人の自立的な生活と尊厳が守られ、生活の質を高める社会の実現を目指したい。

20年程前には、車椅子を使う人や視覚障がい者が街に出ることは少なかったが、今ではさまざまなバリアが改善され、ひとりで街中を移動できる環境が整備されてきている。

認知症の人も、家庭の中や施設の中での閉ざされた生活だけではなく、生き生きとした人生を送るための街の中の環境整備が必要である。



ピクトグラムをはじめ、色彩、大きさなど環境要因をトータルにデザインしたトイレ（福岡市内）